

朝食 ついで汁 午後 とうもろこし

六月十七日 甲辰晴 進高吉

合ふて安まらぬ一筆想ははしく手はたふすまじくも
写し抄葉うし流るく 五流はたはけ左邊も原の糸の淋しみ
大花寺の西に午は佐藤 午後井持寺の
夕にたふすあて椒一

朝食 午房汁 午後 前日言 夕食 和菓子
夕方より井持、拓らるるあくは着向の身玉まて約てうら 午後尼編 和菓子母



二年さ原

井持原

家の

井持

豊初

年一

六月十八日 乙亥 晴

朝人見云云 添書夕仁左方 事

承書下河左方

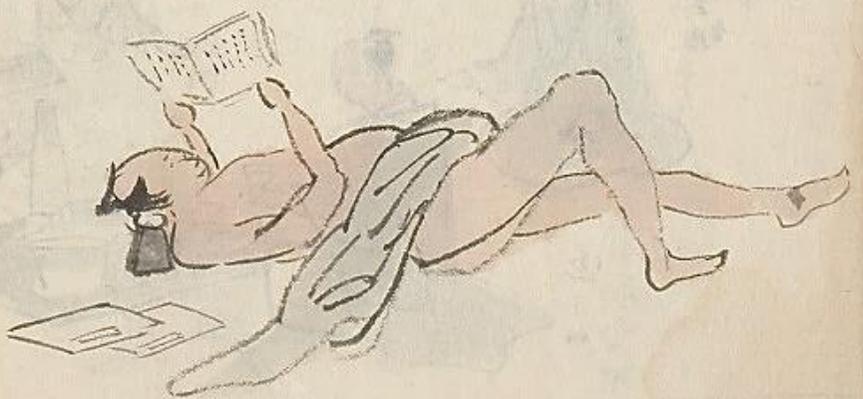
午付任席

夕考博 匪不其く 砂

報告

午飯 八三三三 各日

大運 正申下 桃打集



厚田下河左

玄房 疾言

六月十九日 丙子晴冷如秋氣

大田左院三下ノ史書。〇聖月代

夕青山云花毒の日在之中夜、西下途金毘尼小供所、去秀芳等、西下
中夜之始、以去之約、遊川朝三ノ朝、去下呂村、西下日人、以快極等
別考、去左仁左ノ合々

園村



石高



土産



誠智



〇六月三日 丁丑晴

朝新雨、去所、下夜、半油、萬等、去夜、去花毒等
午、付大花毒、遊下、洋、付、車、他、事、也

十六夜

土着の圖



仁孝

玄山

重平

在七

今に人の状を言はず井多愛を認まじし一少管を愛し井、後る
 夕夕、在化日たの行田、西十途谷同天三市 晴初五舟の飯籠、立寄大里
 登り、お通さ付出 あけのよ 主をたふ碎まじく及や、状あも世陸寺より
 一、初又とちしう、冬あひん不群中、時と本とたしまさる、あより碎一
 けり、在化のそりりて大和の橋り登り あはれ、華後を
 ちのさ母國のこと一 ふるまを甘き ハッー 大に碎てころ

二月廿三日 巳外晴

大虎寺のあまの午好後序

夕花屋寺より星村土直と西子たりあころ

石城日記著者の経歴及其作品

石城日華著者経歴

尾崎隼之助

名を貞幹、始め錦之助と稱し、左内膳、深井勝右衛門の子なり、松平下總守の臣尾崎隼之助の義の養嗣子となり、午隼之助と改む、性磊落不羈、安政四年上書して藩政を論じ、ために執政の忌む所となり、御馬廻役を免せられ、藝展を命ぜられ、一旦食糧百石を以て收ふに僅かに十人扶持を給せらる、明治維新の際、岸島右衛門等と共に藩の爲めに努力し、内外に亘つて幹旋甚だ力のしを以て、執政も亦其才幹を認め、藩學を培根堂教頭に起用せし、後に宮城縣大主典となり、大いに認められ、明治七八年の次任地に在り、病歿せり、性、其後香を好んで講學は子白の末に拘泥せず、直ちに意義の本根に立ち、心に傳ふるを主とした、石城と號して、晨小酒を嗜み、興熱す、或は五六樽を倒すのを常とし、其故に他家へ招かれて行く時は、先づ自己より二三樽を傾けて後に出掛けしと云ふ、斯くせずば、徹宵終に酔ふ事能はば、主人並びに座客に對して感興をおくを恐れたると、

昭和二年十月刊石島嶺山著司馬の行田より